

2015年2月1日 主日礼拝説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書 8章 1～3節

説教「奉仕する女性たち」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松 牧人

「イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた」（1節）とあります。そこでは12人の弟子たちに加えて多くの婦人たちも主イエス一行の宣教活動に仕えていました。そんな女性たちのことについて触れているのはルカによる福音書の特徴です。

この短い報告から、私たちは当たり前のことですっかり忘れていることがあることに気づかされます。町や村を巡り歩く主イエスの一団は結構大所帯です。やがて主イエスは72人を任命して派遣したという記事がありますから、主イエスと行動を共にする人たちの数は増えつつあったに違いありません。毎日の食事や洗濯や宿泊場所はどのようにでしょう。一行の日常生活の細々したことは一体だれがどう手配したのでしょうか。主イエスと弟子たちが宣教活動に専念したのであれば、その背後には一行の日常生活を支え、協力した多くの人たちがいたことを忘れるわけにはいきません。もちろん女性だけではないでしょうが、とくに主イエス一行に奉仕した女性たちの目覚ましい働きや献金があって、主イエスの宣教活動は進められていったことを教えられます。

さて、主イエス一行に奉仕した多くの婦人たちがいたと語るルカは、その中でも特に3人の女性の名をあげています。その筆頭にあげられるのはマグダラの女と呼ばれるマリアです。マグダラというのはガリラヤ湖西岸の町の名で、その町出身のマリアということです。彼女は「七つの悪霊を追い出していただいた」とあります。七つというのは文字通り七つというわけではなく、彼女が抱えていた病の大きさや多さを表している表現です。何とも不気味な言い方が与える印象からか、いつしか彼女は、7章36-50節に登場する主イエスの足に香油を注いだ「罪深い女」と結び付けられることがありましたが、それは根拠のない読み込みです。ただ、彼女は主イエスとの出会いの中で長年苦しんできた病から癒され、喜びをもって献身的に主イエスに従うようになったのです。

次に名があげられているのは、ヘロデの家令クザの妻ヨハナという人物です。ヘロデとは、あの洗礼者ヨハネを獄に投げ首をはねたヘロデ・アンティパスです。この地方の領主であったヘロデ家の資産の管理人であったクザとはそれなりの地位と権力をもっていたに違いありません。そんな役人の妻が主イエス一行の宣教活動を支援し奉仕していたということは驚くべきことです。

もう一人スサンナという女性については何もわかりません。しかし、「そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた」（3節）のです。富める者は、その富を惜しみなく主の御用に捧げたのでした。ルカはこのような女性の存在に注目しています。

主イエスの時代でも、初代教会でも、わが国の場合で言えば戦国時代でも、明治時代

でも、あるいは戦時下の暗い時代の中でも、それぞれ時代的な制約が大きい中で、主イエスに出会った女性たちが、この世の権力や価値観に従うのではなく、自由に、したたかに、主イエスに従い、教会に仕え、人々を励まし、目覚めさせ、社会を変革していった例を、私たちはいくつも数えることができるでしょう。

この女性たちの生活と奉仕のことは、ここ以外にはどこにも記されていません。隠れています。けれども、この女性たちは福音書の最後の方で、すなわち、主イエスの十字架と復活の場面で、主の苦難と死と復活の現場に立ち会った者たちとして記録されているのです。主イエスが十字架上で息を引き取られた時、「ガラヤヤから従って来た婦人たちは遠くに立って、これらのことを見ていた」(23:49)。またそのすぐ後には、「イエスと一緒にガリラヤから来た婦人たちは、ヨセフの後について生き、墓と、イエスの遺体が収められている有様とを見届け、家に帰って、香料と香油を準備した」(23:55~56)とあります。

そして何よりも復活の朝、彼女たちは用意していた香料をもって主イエスの墓に出かけますが、墓の中に主イエスのからだは見当たらず、途方に暮れる中、天使と思しき若者たちから主イエスの復活の知らせを聞き、一部始終を弟子たちに伝えたのです(24:10~11)。

十字架の場面も復活の朝の場面もそこに男の弟子たちの姿はありません。けれども、彼女たちは恐れおののきながらも離れないで立っていました。女の人だからできたことかもしれません。女性は人数にも数えられず、その証言は無効だとみなされていた時代でした。そんな時代に、神は御子イエスの十字架と復活という救いの御業をこの世に告げるために、力ある男たちではなく、世の中で弱い立場にあり軽んじられていた女性たちをお用いになられました。これは本当に驚くべき不思議な神のなさり方です。

もちろん、女と男とどちらが強いか弱いか、どちらが主イエスに良く仕えることができるかどうかという話ではありません。主イエスと12人が宣教活動の中心であったことは言うまでもないことですが、それは言ってみれば氷山の一角にすぎず、水面下に隠れたところで、この女性たちの、また名もない人たちの献身的な奉仕がなされていて、それで宣教の業が支えられていたのです。黙々と、忍耐強く、さまざまな気配りもしながら、み言葉に聴き続け、祈り続け、奉仕を続ける人たちによって福音の宣教は進展し、主の教会は建ち続けるのです。「教会は華やかな人格を必要としているのではなく、イエスと兄弟への真実な奉仕者を必要としている」(ボンヘッファー)。私たちがイエスと兄弟姉妹たちへの真実な奉仕者として連なっていきたいものです。